ふるさとに春風を　センバツの地域面

■新編集講座 ウェブ版　第120号　2019/3/15

毎日新聞社　技術本部長（元・大阪本社編集制作センター室長）　三宅　直人

春はセンバツから――第91回選抜高校野球大会（毎日新聞社、日本高野連主催）は3月23日、兵庫県西宮市の阪神甲子園球場で開幕します＝写真①は昨年の大会。熱戦の模様は、本紙スポーツ面やインターネット中継「センバツLIVE！」＝右欄参照＝でお伝えします。加えて、地元チームの活躍の様子は本紙の地域面で詳報します。昨年の開会式の日を例に、地域面の紙面制作を概観しました。

■　校名見出しと行進写真

開会式翌日の朝刊地域面（昨年なら3月 24 日）は、出場校の名を大きな見出しにし、入場行進の写真をあしらうのが定番です。実際の紙面を見ると、秋田版＝下図②＝は縦見出し、愛媛版は横見出し＝右図③＝と、編集者の個性は感じますが、設計の考え方は同じです。

ただ、地域面の全体デザイン（題字や天気の配置）が東京本社（秋田）と大阪本社（愛媛）で異なり、見た目の印象はかなり違います。

■　複数出場、さあどうする

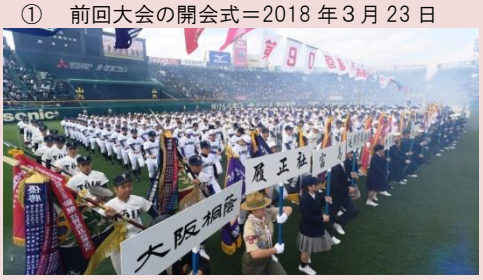
同一県から複数校が出場した場合、編集者は頭を悩ませます。

石川版＝右図④＝の場合、星稜と航空石川を均等に扱い、航空石川の「きょう対戦」という記事も入れ、最大限の扱いにしました。

神奈川版＝右図⑤＝は社会人野球も入るのでセンバツを小ぶりにしました。ただ東海大相模の対戦相手が聖光になった＝右欄参照＝のを見出しにしたため、もう一つの出場校・慶応が見出しから消えました。「堂々と行進」という見出しをやめてでも（写真を見れば分かります）、慶応を見出しにすればよかったと思います。

３校出場の滋賀版も、大見出しが「県勢３校 堂々入場」では、もの足りない気がします＝右図⑥。校名を大見出しに入れた例を考えました＝右図⑦。芸はないですが、分かりやすいと思います。

①　前回大会の開会式＝2018 年３月 23 日



センバツ LIVE!

毎日新聞社と毎日放送は 12 日、Yahoo! JAPAN が運営するスポーツ総合サイト「スポーツナビ」に「センバツ LIVE！2019」を開設しました。本日 15 日の組み合わせ抽選会をはじめ、大会の全 31 試合をライブ中継します。

（左）②秋田版＝18年３月24日朝刊（以下同）
（上）③愛媛版（下）④石川版（左下）⑤神奈川版

東海大相模の相手　組み合わせ抽選の時点で「東筑（福岡）と聖光学院（福島）の勝者」とだけ決定。開会式直後の第１試合で聖光学院が勝ちました。

（上）⑥滋賀版
（右）⑦見出し案

近江だ 彦根東だ 膳所だ
湖国3校、甲子園の土を踏みしめ

滋賀の人は自県を「湖国」と称します

■ 「変化球」の航空写真

ここまでは、どの地域面も入場行進の写真を使っていました。その点で「変化球」の扱い**＝右欄参照＝**をしているのが北海道版。全校選手がグラウンドに勢ぞろいしたシーンをヘリコプターから撮影した写真を掲載**＝右図⑧**。「地元らしさ」がありません。

実は北海道発行の毎日新聞は、地元出場校・駒大苫小牧の入場行進の写真を１面に使いました**＝右図⑨**。全国ニュースを掲載する１面も、全国の本支社ごとに地域性に配慮しています。その結果、１面に地元、地域面に全校という「逆転」が生じたのでした。

「変化球」の扱い　左の段落で見出しにも本文にも「変化球」という表現を使ったのは、センバツがテーマだから。高校絵画展がテーマなら「異色」にしたでしょう。ちなみに末尾の「逆転」も野球用語。こんな工夫が編集者のこだわりなのです。

（上）⑧北海道版　（下）⑨１面（北海道支社版）

■ 勝てば天国、あれもこれも

開会式当日に試合が組まれることも当然あります。選手はもちろん、地域面向けの取材をする記者（多くは地元支局から出張の若手）も、開会式独特の緊張がほぐれない中でのプレーボール。入場行進の原稿を書きながらゲームの取材をする離れ業も必要です。

それでも勝てば天国。開幕日に白星を挙げれば、記者も編集者も盛り上がります。例えば、昨年では栃木版**＝右図⑩**。試合結果を横見出しで大きく扱い、写真も記事もふんだんに使用。開会式の入場行進の写真も入れ、「あれもこれも」の欲張り紙面です。

（上）⑩栃木版

■ 春なのに お別れですか

逆に、負けた場合は大変です。とりわけ開会式直後の第１試合（いわゆる開幕試合）で敗退すると、実質滞在半日で甲子園を去らないといけません。選手だけでなく、出張の記者も心残りです。

紙面も、敗退したので入場行進写真は使いづらく、試合中心の構成になります。昨年の福岡版の見出しは「夏の糧に」**＝下図⑪**。柏原芳恵さんの名曲「春なのに」の歌詞（中島みゆきさん作詞）を借りれば、「春なのに お別れですか」「ため息 またひとつ」という気持ちです。

（左と上）⑪センバツで見開きの福岡版

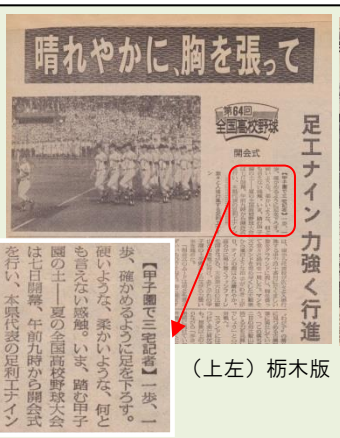
■ 炎天下、アルプスを駆けた若手時代

私自身は、センバツの地域面取材をする機会はなかったのですが、宇都宮支局に勤務していた入社２年目の 1982 年、夏の高校野球「特派員」として、栃木から甲子園に出張しました。

当時は２校を担当することが多く、私は栃木県代表の足利工のほか、青森県代表の木造（きづくり）も担当。汗でずぶぬれになりながら、アルプススタンドを走り回り取材しました。

デジタル化が進み、組み版途中でも出先記者に紙面を送信できる現在とは異なり、当時は紙面＝図⑧＝が届くのは数日後。自分の記事が載った新聞が届くのが待ち遠しい気分でした。

ちなみにこの年の甲子園は、早実（東東京）の荒木大輔投手（卒業後ヤクルト入り）が大フィーバーしていました。



（上左）栃木版　（上右）青森版

＝ともに 1982 年８月８日 朝刊